

書 評

竹村和子 著

『境界を攪乱する — 性・生・暴力』

高 村 峰 生

理論を抽象的として退けることも理論を抽象化して解釈の「方法」とすることともに、「他者」を「べつの場所」に配置することで決着するような思考の怠惰な抽象性に起因するものに過ぎないと、この「攪乱」の書物は告げている。「乱すこと」のみでは足りない—身を投じて「乱れること」。それこそが真に理論的な態度であり、論じる主体の倫理である。「他者は、どこかべつの場所ではなく、ここに、わたしたちのなかに、〈わたし〉のなかにいる」といった文章のどこか息切れた読点の多さや、差異を含みながら反復することばの物質性は、そこで伝えられようとする「〈わたし〉の中の他者」というテーゼと深い関係があるだろう(92-93)。「他者」を把握するだけでなく、自らのうちに他者を見出し、常に他者へと変貌するプロセスにある自己をアイデンティティの政治に対する抵抗の根拠とすること。理論を語ることは同一化されたものを順序だてて説明することではなく、自己の中の、そして言語そのものの他者性との格闘であり、そこにこそ書くことの倫理が賭けられているのだ。

竹村和子が2011年の暮れに亡くなって以来、三冊の論文集が次々と公刊された。まず2012年6月に小林富久子の編集によって『文学力の挑戦—ファミリー・欲望・テロリズム』(研究社)が出され、19世紀家庭小説から現代の作家であるドン・デリーロまで様々なアメリカ文学の作家、作品についての論文が収められた。この書物は、竹村の手によって生前完成されていたものであ

る。同年12月には、新田啓子の編集によって『彼女は何を視ているのか— 映像表象と欲望の深層』（作品社）が発表され、映画や写真についての論文や、映画作家、批評家へのインタビューが収録された。そして2013年5月、「最後の遺著」となる『境界を攪乱する— 性・生・暴力』（岩波書店）が上野千鶴子の編集によって刊行された（407）。ここには、バトラーをはじめとして、ミシェル・フーコー、ジャック・デリダ、ジョルジョ・アガンベンなどの批評家とテキストを通じた対話を重ねながら、性や暴力をめぐる政治について鋭利な理論的考察を行う批評家としての竹村の姿を見ることが出来る。もちろん、彼女の著作は全てが理論的であると同時に具体的であって、対象が文学であれ、映画であれ、社会的事象であれ、強靱な理論分析を行いながらも具体的な事象のあいだを躍動するように記述が連ねられる。そうした意味で編者の上野が巻末に置かれた「解説」を「竹村和子とは誰か？」と問うことから始め、彼女を「アメリカ文学研究者」という表向きアイデンティティから引き離しているのは、アイデンティティ・ポリティックスを批判し続けた竹村に対して極めて誠実な身振りであると言えるだろう。とはいえ、本書が竹村の第一著書である『愛について— アイデンティティと欲望の政治学』での探求を継続した理論的著作であって、思想家としての彼女の大きさをよく表したものであることは間違いない。彼女は『愛について』の「序」において5つの章の概略を示した後、「まだまだ書き尽くせないものがあることに気づく」と述べていた（26）。多くの研究者の協力によってその姿を現した本書は、おそらくそのような先行著書における残滓を出発点とし、彼女がその死まで重ねてきた10年ほどの思考の軌跡を示していると言えるだろう。

本書は「セクシュアリティ」（第1－2章）、「フェミニズム理論」（第3－4章）、「バトラー解説」（第5－10章）、「生政治と暴力」（第11－15章）という4部に配された15の論文、および一つの「付論」によって構成されている。これらの論考は様々な媒体で発表され、論文集や学会誌に収録されたものや翻訳書の解説やあとがきとして書かれたものが混在して文体にばらつきがあり、時として主張が反復されているようなところもある。しかしそのようなものとして

は、章間の関係は緊密かつ整合的であり、著者の思考の強度を伝えるものとなっている。紙幅の関係からここで全てを紹介することはできないが、順を追って特に重要と思われる論文を見て行きたい。

社会構築主義と本質主義の「共犯関係」を論じる第一章（初出2001年）は、「本質的だと思われるものは実は社会的に構築されているに過ぎない」と指摘すれば事足りると考えている社会構築主義者に対して警鐘を鳴らす。異性愛主義と資本主義社会の結びつきについてのジュディス・バトラーとナンシー・フレイザーの見解の相違を辿りながら、両者が非異性愛者に対して与えられた集団的アイデンティティ——それは政治的権力による「承認」という形をとる——そのものを解体するという点については不徹底であると指摘し、「異性愛主義をおびやかす最大の脅威は、じつは同性愛者ではなく、異性愛者と自認している者が自分自身のなかの非異性愛の可能性に気づくとき、あるいは自己の異性愛のアイデンティティに疑いをいだくときである」と論じる(11)。性愛を本質的に捉えるにせよ構築主義的に捉えるにせよ、それを主体と結び付けてカテゴライズすることそのものがアイデンティティ・ポリティクスに寄与することになるのであり、そのような生政治を生産的に攪乱するためには「男」と「女」、「異性愛者」と「同性愛者」というように二分法的に構築されたフィクションを否定し、主体における性の複数性を肯定する必要があるのだ。このプロセスを竹村は「アイデンティティをアイデンティティの内部で脱構築していくこと」と表現している(30)。第二章においてトランスセクシュアルの重要性が強調されるのも、このような理論的枠組みのもとでのことである。

第二部「フェミニズム理論」の第四章（初出2004年）は実質的に第一章の議論を引き継いでおり、ダイアナ・ファス、テレサ・デ・ラウレティス、ガヤトリ・C・スピヴァックなどを参照しながら、社会構築主義による安易な本質主義批判の問題点について考察している。スピヴァックによれば、社会構築主義は本質主義を批判する身振りの中で「〈社会的なもの〉を本質とみなす考え方に帰着するにすぎない」(109に引用)。竹村はこのような批評的「置換」の危

険性に注意を喚起しつつ、かつて本質主義的として批判されていたリュス・イリガライをスピヴァックやドゥルシア・コーネルらが再評価していることを紹介する。さらに、修辭的な「置換」と「社会／身体領域」の接続点と乖離点をめぐる諸問題が、コーネルによるスピヴァック批判、レオ・ベルサーニによるイヴ・K・セジウィックやバトラーに対する批判などを經由しながらなされていく。その密度の高い記述は理論に対する極めてアクチュアルな関心と正確な理解から成されたものであり、圧巻である。議論はここで転回し、ジョアン・コプチェクの議論を追いながら、能動的性としての「男性」と受動的性としての「女性」という表象を支えているのは、表象不可能なものとしての「自己の内なる暴力性」であるという主張にいたる。ここで「暴力」が「外」に措定されているのではなく、「自己の内なる」という限定のもとで考察されていることに注意しなければならない。自己の他者性を認識することこそが真に理論的な態度であり、思考の倫理であるのだ。

「暴力」の問いは本書第四部に引き継がれるが、そのまえに第三部において竹村和子にとって最重要の批評家であるジュディス・バトラーの著作を紹介する文章が並ぶ。異性愛が本質的なものではなく、言語の反復によってパフォーマンスに構成されたものであることを様々なフェミニズム理論家の著作を批判的に読解しながら明らかにした『ジェンダー・トラブル』、言語の行為遂行性が現実の政治の中でどのように現れるのかを国家と性の関係を中心に具体的な事例を追って検討した『触発する言葉』、ソフォクレスの古代演劇と様々な哲学者によるその解説を再検討することで、制度としての親族関係とそれと相違する親密さについて論じた『アンティゴネーの主張』など、竹村の訳したバトラーの著作への応答的な解説がここに収められている。2006年に『思想』に掲載された第八章は『ジェンダーをほどく』を読解しながら、バトラーが「生存可能性」(viability) という語をキーワードにして、2000年代初頭の頃から政治的な問題へのコミットを強め始めた変化を捉えている。第九章は、デリダ、ベギー・カムフ、スラヴォイ・ジジェクとバトラーを交錯させながら、関係の喪失というトラウマ的切断を主体の起源とするラカン的な主体概念ではな

く、「贈与」や「散種」といったデリダ的な差異の運動を「性的差異の意味づけなおし」の契機とすることを提案している(211)。「解説」において上野も指摘していることだが、この第三部を通じて印象的なのは、竹村がバトラーの議論を紹介・解説しているだけでなく、時としてその限界を指摘したり批判を行ったりしていることである。バトラーのような現代を代表する思想家に対して異議申し立てをするというのは相当な準備と自信の必要なことであり、この点にも竹村の学問的誠実さや妥協のなさがよく表れている。

「生政治と暴力」と題された第四部に入ると、風景は一変する。著者がここで扱っているのは現代においてそのプレゼンスが高まる一方である生政治に対する抵抗であり、いわゆる「メタボ検診」の義務化など日本における権力による生命管理の事例にも多く触れて、理論的問題が日本人である我々にもアクチュアルなものであることを示唆している。竹村最晩年の思考をもっと顕著に表す部分であるので、詳細に見ていきたい。

第十一章(2010年)では、ジョルジョ・アガンベンやアントニオ・ネグリなど現代の思想家たちによるハーマン・メルヴィルの「代書人バートルビー」の読解を紹介しながら、その主人公の提示する「受動的抵抗」の射程を検討している。竹村はそこにはとどまらず、物語の語り手へと視線を移し、自分自身では「正しく」語ることの出来ないバートルビーについて語るという行為に資本主義への「抵抗」を読み取っている(265-66)。文学的思考と哲学的思考が密接に関連する一章である。

第十二章(2008年)は同年に予定されていたネグリ来日にあわせて書かれた(この来日は日本国政府によるネグリに対する入国拒否によって実現しなかった)ものである。フーコーの生政治批判を引き継いだネグリは、個人の管理不能で動的な「存在論的な非連続性」を集合的な結びつきを産み出す抵抗の場とすることを提案する。これに対して竹村はネグリの議論が近代的な「人間」という概念を前提としていることを批判し、「脱人間化・脱擬人化が進行している現状への視座」が欠けていると述べている(285)。

第十三章(2003年)は、バトラーの『アンティゴネーの主張』を「ポストファ

ミリー言説に集約していく」ものとして不十分であるとするところから説き起こして、アンティゴネーとクレオーンの関係に注目しながら『『暴力のその後』にいかなる裁定・正義・平和がありえるのか』という問いを探求している(291)。竹村は、バトラーだけでなくヘーゲル、デリダの『アンティゴネー』、『オイディプス王』、『コロノスのオイディプス』というソフォクレスの三部作をクレオーンの言葉に注目して解説することで、そこに「男女の境界の揺らぎ」を読み取り、テキストにおける共同体の法＝〈父〉の位置を脱構築している(325)。

第十四章(2008年)は、暴力を考える際のアガンベンの「ホモ・サケル」(「市民によって殺害可能な人々」の意)概念を紹介しながら、2004年に発覚したアブグレイブ刑務所における米軍によるイラク人捕囚者に対する虐待について論じ、現代においては市民と「ホモ・サケル」を分ける境界線が安定的なものではなくなっていると主張している。しかし、ハリウッド映画などで暴力表象を消費することと結び付けて、「拷問をおこなった兵士たち」を例外的な存在ではないとする箇所はやや短絡的であるように感じた(347)。評者にとっては、ここがこの書物における唯一はっきりとした疑問点であったのであえて言及しておく。

第十五章(2008年)は、バイオポリティクスの浸透した現代において、いまだ近代的なものにとどまっている「暴力」のイメージを更新する必要性を論じている。近代国家における「市民」が暴力的な「非市民」との境界線を設けるものであったとすれば、そのような境界は曖昧になっており、我々はあらたな暴力を既存の概念装置によって説明して満足することは出来ないと主張している。

この第四部は、全体として竹村の思考がジェンダーから暴力へとその重心を移しつつあったことを示しており、それは21世紀におけるバトラーの思索の軌跡と一致している。しかし、これら暴力についての論考においてバトラーへの言及は減り、逆に日米における政治・社会状況への言及が増えているのであり、ここに思想家としての竹村のさらなる飛翔が胚胎していたように思う。残念な

ことに竹村の思考はここで途絶せざるを得なかったが、彼女の好んだデリダ起源の言葉を使うならば、ここにおいて完成されなかったものは読者において引き継がれるべきものとして「散種」されている。

コードとして付されている「翻訳の政治」(2001年)は、『愛について』の最終章が翻訳と普遍性をめぐるものであったことを思い起こさせる。翻訳は通常、他者を同化させるプロセスと考えられているが、実のところ翻訳されたものとは「翻訳する側の文化や言語体系の内部で抑圧されていた他者ではないか」と主張している(387)。翻訳は「外」から「内」へと変換しつつ導入することではなく、「内なる他性」を開示するものであるのだ。このようにして「自己の内部における〈他者〉」という主題が反復される時、それを読む者は、異性愛と同性愛の関係から言語と外国語の関係まで一貫している竹村の「他者」についての思考の強度にうたれるだろう。

「境界の攪乱される」クリティカルな一瞬の重要性を追求し続けた竹村は分野横断的な研究者であったが、これははじめに分野があり彼女がそれを横断したというわけではない。彼女は「学問分野」などという近代の制度によって作られた境界を一顧だにしないことによって、どこまでも思考し続けることの倫理を示したのである。『境界を攪乱する』は閉じられた書物ではない。それはいたるところにまだまだ書き足すことの可能な余白を抱えているような進行形の作品であり、そのことがまさに彼女亡き後まだこの世にある者への贈与のように感じられる。それは、他なるものの参入を今でも——永遠に——待ち望んでいるのだ。

(岩波書店、2013年5月、本文431頁)